

特別支援学校における協同的体制による俳句創作指導に関する研究 (1)

—授業研究、学習者研究、教員研修研究の複合的方法による実践研究—

植山 俊宏・深田 菜々子・杉山 瑞葵

A Study on Haiku Creation Guidance by Cooperative System in Special Needs Schools
-Practical research through combined methods of classroom research, learner research, and
teacher training research-

Toshihiro UYAMA, Nanako HUKATA, Mizuki SUGIYAMA

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第6号 (2024年1月)

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.6 (January 2024)

特別支援学校における協同的体制による俳句創作指導に関する研究 (1)

—授業研究、学習者研究、教員研修研究の複合的方法による実践研究—

植山俊宏、深田菜々子、杉山瑞葵

(京都教育大学・京都教育大学附属特別支援学校・宇治市立南宇治中学校)

A Study on Haiku Creation Guidance by Cooperative System in Special Needs Schools
—Practical research through combined methods of classroom research, learner research, and
teacher training research—

Toshihiro UHEYAMA · Nanako HUKATA · Mizuki SUGIYAMA

2023年8月31日受理

抄録：特別支援学校において中長期的に実践した俳句創作活動を授業研究、学習者研究、教員研修研究などの多角的な面から考察し、実践上の成果、研究上の成果を確認した。俳句創作で生み出された言語を検討することで岡本夏木の提唱した「一次のことば」から「二次のことば」への質的向上を事実レベルで確認した。

キーワード：知的障がい児、俳句創作、「二次のことば」、自尊感情、自己肯定感、教員研修

I. 研究の背景・目的・仮説

1. 研究の背景

(1) 臨床的授業研究及び教員研修の開拓

植山・大西は、2022年度通年の特別支援学校における俳句創作指導を実施した。これは、年間21回に及ぶ長期的な実践となるとともに、毎回授業に対して考察を加える一種のサイクルとしての授業研究の意味ももっていた。大西が、京都府教育委員会派遣長期現職研修生であったため、現職研修の側面も備えていた。成果を「大学・附属特別支援学校連携による俳句創作実践プロジェクトへの参与型現職研修に関する研究」（『京都教育大学教職キャリア高度化センター研究紀要』第5号2023年1月）として集約し、有効性の高い一つのモデルを提唱した。新たな教員研修の手法として構築できた。1)

(2) 協同体制による長期の実践を通じた参与型現職研修（教員研修）

本研究には、前年度に引き続き参与型の現職研修として2023年度京都府教育委員会派遣長期研修生杉山瑞葵教諭が携わるとともに、京都教育大学附属特別支援学校の深田菜々子教諭も共同実践者として参加した。授業研究、学習者研究、教員研修研究の複合的な研究となる。本報告では、前半の6回の実践を分析する。

俳句創作では季語の使用が必須条件となるので、必然的に四季のすべてを言語的に経験する。この俳句の長期的実践化を図ると、長期に授業に参与する側面と年間カリキュラムの開発の側面の両面を備えることになり、研修の実質を確保することにつながる。また、植山と深田教諭との三者の協議を行うことで、臨床的な教員研修としての成果を問うことも実現している。サイクルとしては、実践済みの前回分の授業研究を生かした授業計画立案から始まり、実践と直後の臨床的な研修（OJT）が行われ、最終的にOFF-JTとして、生徒の俳句作品の分析を通じた実践の有効性の検討が加えられるという一定の循環化を図っている。教材作成、実践、事後の作品検討を通じた句集づくり、次時冒頭における句集配布、作品の評価提示という循環的なカリキュラム作成と表裏一体となっており、カリキュラム開発の視点からとらえることも可能である。

(3) 特別支援学校生徒の言語表現による自己表出

岡本夏木は、「一次的事ば」と「二次的事ば」の提唱者として著名である。岡本には特別支援生徒に着目した「二次的事ば」の有効性に関する記述がある。偶然であるが、当該例は、京都教育大学附属特別支援学校の前身である京都教育大学附属養護学校のものである。岡本は当時校長（大学教授との併任）であった。ある生徒が自らに対して「ことば」を用いることで行動に成功した事例である。卒業式の卒業証書の授与の場面である。

身を洗われるような感じが私を走った。その子は、集団行動に加わるのを恐れるときや、プールに入ることができないとき、先生や友だちからはたえず「どうもない、どうもない、やれ、がんばれ」と事あるごとにはげましつづけられてきたのである。おそらく「どうもない」という語は彼がもつとも多く周囲から投げかけられてきたことばであろう。前日までの卒業式の練習でも、登壇をひるむ彼を、先生たちは「どうもない、どうもない、上がれ」と叱咤激励してきたのである。

そのかれが、今、私の前で日頃皆から言われてきたことばを、自分で用い、自分で自分をはげましなが、必死に不安にたえようとしているのであった。それはもはやたんなる反響語ではない。外から人によって与えられてきたことばを、わがものとして、自分を支える契機としていま使っているのである。ことばの獲得とは、まさにこういう過程をいうのであろう。『子どもとことば』2)

この例から原初的でありながらも二次的事ばの使用が、言語使用者自身の行動を律し、目的の遂行に成功したことを読み取ることができる。言語機能のうち、コミュニケーション機能を反映したものである。通常、目的とする行動を実現するためには、スモールステップ化した「訓練」的な学習が想定される。言語使用を行動遂行のために活用する学習方法は、少数に属すると思われる。だからこそ、当事者である岡本の目には、この言語と行動が一体化した振る舞いは新規の事例としてとらえられたと推測できる。

2022年度は、主要な言語機能の一つとして挙げられる「自己表出機能と非認知能力を考察するとさらに大きな世界が見えてくるのが容易に想像される」との推論を仮説として設定し、実践、研究を構想、実施した。3)

(4) 2022年度の実践－研究の成果と課題の確認として－

2022年度の前半期10回分の報告と分析については、すでに「大学・附属特別支援学校連携による俳句創作実践プロジェクトへの参与型現職研修に関する研究」（『京都教育大学教職キャリア高度化センター研究紀要』第5号2023年1月）に発表している。ここでは、全体像を中心に振り返りも兼ねて考察を行うこととする。

授業者である植山も大西も特別支援学校における俳句創作実践は経験がなく、教材作成（スライド）の段階から手探り状態で取り組んだ。正式には、クラブ活動として位置づけられており、放課後の30分程度を充てて行った。生徒にはクラブ活動の意識はほとんどなく、新しい授業に参加している意識であったようである。参加人数の変化に表れているように、当日のコンディション、他のクラブ活動の選択などの要素が関わってきて、毎回の学習の様態が安定的に推移したとはいえない。実践を整理すると次のようになる。

回	日時	季題	スライド	人数	句数	ワークシート	句集	配布
1	5月26日	かしわもち	12	11	0	0	なし	なし
2	5月31日	★おたまじゃくし（おたま）	6	7	7	1	おたま	6月7日
3	6月7日	★きゅうり	3	9	9	1	きゅうり	6月9日
4	6月9日	★あじさい	4	7	9	1	あじさい	6月29日
5	6月29日	★バナナ	4	8	13	1	バナナ	7月6日
6	7月6日	★たなばた	4	9	16	1	たなばた	7月20日
7	7月20日	★スイカ	4	8	15	1	すいか	7月21日
8	7月21日	なつやすみ	4	9	14	1	なつやすみ	8月23日
9	8月23日	★ひまわり	4	7	13	1	ひまわり	8月24日
10	8月24日	あせ	4	4	9	1	あせ	9月15日
11	9月15日	月	5	7	15	1	月	10月13日

12	10月6日	★こすもす	4	5	12	1	こすもす	10月13日
13	10月13日	★ハロウィン	4	7	15	1	ハロウィン	11月24日
14	11月24日	★くり、さつまいも、かき	4	4	8	1	くりかきいも	12月1日
15	12月1日	★だいこん	4	5	10	1	だいこん	1月17日
16	1月17日	新年	4	5	14	1	新年	2月2日
17	2月2日	せつぶん、まめまき、えほうまき	4	8	17	1	せつぶん	2月9日
18	2月9日	バレンタイン	4	6	12	1	バレンタイン	3月2日
19	3月2日	ひなまつり	4	6	13	1	ひなまつり	3月9日
20	3月9日	春	14	8	17	1	春	3月13日

当初、俳句クラブは美術クラブとともに文化部として活動したため、俳句クラブに参加する生徒は、美術クラブの創作を中断して参加していた。その結果、美術の制作を継続させたい生徒が美術クラブを続けるため、俳句クラブを欠席するという事態も現れた。毎回の参加者数の平均は7名、句数の平均は11.9句であった。前半期、後半期別に平均を見ると、前半10回は10.5句、後半10回は13.3句であり、明らかに後半は増加している。

★印を付した季題の活動の折には、実物を持ち込んだ。実践の手順は、以下のとおりである。

- ①前回の句集を配布し、一句ごと評語担当者が、作品と評語を読み上げる。※初回のみなし。
- ②今回の季題について、スライドを用いて、クイズ形式で探り当てを行う。スライドは謎かけと謎解きを担う。
- ③季題について、理解度の把握、イメージ想起などの意図で短い対話を行う。
- ④欄を三つ設けたワークシートを配布し、三つの欄（5・7・5）を埋めていく手法で句作をさせる。文字表記や音律の計算が難しい生徒、誤記がみられる生徒などについては、個別に指導する。
- ⑤句数の制限は設けない。

前半は、実物を提示し、そこから句想を得るように指示したが、句作に慣れてきた第6回は、七夕の願いを俳句の形式で詠ませた。第10回の季題「あせ」では、「あせが出る」、「あせがひく」、「あせをふく」、「あせをながす」などの動詞的な表現に挑戦させた。第20回は、最終の実践であったので、「春」を季題とし、自由に発想させた。「たんぼぼ」、「ふきのとう」などの植物などの実物を詠んだものが多かったが、中には「春期は別れの時だ卒業式」のように抽象的な内容を持つ句を詠む生徒も現れた。

第10回までの作品から「とっておきの芸術祭」（障碍児対象コンクール）と「たんば青春俳句祭」（中学校、高校対象コンクール）に応募用の作品を選考し、投稿した。選考作業は、特別支援学校教員が行った。「とっておきの芸術祭」に3句、「たんば青春俳句祭」に20句応募した。

<とっておきの芸術祭>京都市長賞 すいかはねわらってるようにみえるんだ B
京都市長賞は、全体で2位の位置づけである。

<たんば青春俳句祭>優秀賞 ひまわりのタネのもようが黙示録 K 4)

<たんば青春俳句祭>は、公開選句会で行われ、高校の部の優秀賞の筆頭で選ばれた（応募総数は約1000句）。

研究の成果として確認できることは、自己表出の手段として俳句創作が獲得できると、個々の生徒の自身の認知特性に合わせて表現できるようになること、自己の俳句に対する評語に期待して、文字言語を媒介としたコミュニケーションが成立するようになること、他者の作品にも次第に興味を抱くようになることなどである。俳句創作学習が他者とのコミュニケーション力の向上にも寄与することも期待できた。

2022年度の実践及び考察によって、俳句創作と自尊感情、自己肯定感の向上の関係を垣間見ることができた。

(5) 「二次的ことば」（岡本夏木）としての俳句創作

俳句は、座の文学という側面ももち、ライブ性を前提とした表現形式である。これを岡本の「一次のことば」と「二次的ことば」の関係に当てはめてみると、両者の過渡的な面を持つことが見えてくる。岡本の定義を『こ

とばと発達』から引用する。5)

- (1)ある事象や事物について、それが実際に生じたり存在したりしている現実の場面を離れたところで、それらについてことばで表現することが求められる。〈後略〉
- (2)ことばをさしむけるコミュニケーションの対象が、一次的事ことばのように、自分の経験や状況を共有してくれやすい親しい少数の特定者でなく、自分と直接交渉のない未知の不定多数者にむけて、さらには抽象化された聞き手一般を想定して、ことばを使うことが要求される。
- (3)一次的事ことばが、原則的には一対一の会話による自他の相互交渉、相互照合によって展開していったのに対して、二次的事ことばでは、自分の側からの一方向的伝達行為として行なわれ、少なくともその行為の間では、相手からの直接の言語的フィードバックは期待できない。
- (4)一次的事ことばは「話しことば」(広義には、動作ことばも含めて)であるが、二次的事ことばは、「話しことば」だけでなく、そこに「書きことば」が加わってくる。つまりコミュニケーションの媒体が、一次的事ことばでは音声中心であったが、二次的事ことばではその担い手が音声であることもあれば文字であることもある。

俳句創作の実際は、「座の文学」として場面に依拠することがありつつ、発信の面からみると他者と同居していても「自分の方からの一方向的伝達行為」が行われる。特別支援学校生徒にとって、クラスメートといっしょに創作するが、個人で他者に伝わる表現を選択していく必要に迫られる。

2. 研究の目的・仮説

(1) 研究の目的・仮説

①俳句創作と自尊感情・自己肯定感の向上との有機的な関係

2022年度の研究では、俳句創作活動は成功をおさめ、参加生徒全員の創作意欲は高まった。コンクールでの入賞などで対外的評価も受けた。この俳句による自己表出の手段の獲得について、今回も引き続き研究の目的とする。しかしながら、個々の生徒の自尊感情、自己肯定感については、20回という回数の中で明らかに姿勢、態度の変化が見られたが、研究的に把握するところまで至らなかった。今回は、生徒の姿勢、態度の所見を深田が記述し、その変化をとらえることも一つの研究の目的とした。仮説として、俳句創作手段の獲得が、自尊感情、自己肯定感の向上と密接に関わっていると、その分析、検証を行うこととする。

②俳句表現活動(句会)の社会性育成への貢献

特別支援学校生徒の俳句は、この4条件を満たす形で表出されるわけではない。12歳~18歳の生徒なので、一次的事ことばに近い形の表出を行う生徒もいるし、ある程度書きことばを使いこなす生徒もいる。5・7・5という定型、季語という約束ごとは、この4条件に合う形の表現を導きやすく、集団で一定の方向性を持つ。句会という俳句表現活動が社会性の育成に役立つことを研究仮説として設定し、その実態把握を研究の目的とした。

③教員研修の実証的研究—参与型現職研修の継続—

今回も前年度に続き、京都府教育委員会派遣長期現職研修生の参与型現職研修を兼ねている。これまで事前研、実践、事後研(授業研究)の一連の枠組みで現職研修の実践とその考察をセットに取り組んできた。本年度もより汎用性の高い実践方法を理論化していくことを研究の目的とした。については教員研修の成果として特別支援学校・学級の児童生徒に対する汎用的な学習指導法を確立することが可能であるとの研究仮説を設定した。

II. 授業の実際とその考察—2023年度前半期—

授業の実際とその考察については、授業の事実に側面とその考察を杉山瑞葵が担当し、参加した生徒の観察から得られた考察を深田菜々が担当した。前半の第1回(5月11日)~第4回(7月6日)は学期中であったため、授業の延長上に当該の俳句クラブ活動は設定され、後半の第5回(7月21日)、第6回(8月21日)は夏季休業中の設定となったため、参加可能な環境が大きく異なった。後半の2回は、前半の半数以下の少人数による実施となった。俳句創作にはさしたる違いは見られなかったため、連続して記述、考察した。参加生徒の見取り

については、参加生徒の相互の働きかけに大きな相違があったため、前後半を分けて記述、考察を行った。

1. 授業の実際

(1) 第1回「青葉」＝5月11日

1)ねらいと準備

俳句について興味を引き出せるよう、写真入りのスライドを用いてクイズ形式で導入を行った。今回のお題が“青葉”であったので、青葉の写真を複数撮影し、お題紹介のスライドで用いた。

2)作品

青葉よ なぜなぜ なぜなぜ みどりなの	A
青葉アオ虫のからだのいろにしている	B
あおばでは 春の花なので 今のうちだぜ	C

3)事後の検討

俳句の創作に対しては、とても意欲的に取り組もうとする姿勢があり、スライドでの説明で「やってみたい」と思わせることが出来ていたと感じる。一方、お題である“青葉”が子ども達にとって、あまりイメージできるものではなかった。作品の傾向としては「色」や「形」に関わるものが大半を占めていたため、五感や想像を働かせられるような題材ではなかったという点が一番の反省点であった。また青葉を花表現してしまう作品が多かったことも印象的であった。

(2) 第2回「おたまじゃくし・おたま」＝6月8日

1)ねらいと準備

前回の反省を活かし、実際に見たり触れたりできる方がよいとの意見も踏まえて“おたまじゃくし”を題材とした。おたまじゃくしは当日、俳句創作に昨年参加していた生徒が校内で捕まえたものを用いた。

2)作品

おたまさんかんきょうかわりたいへんだ	D
おたまくんしっぽかわいいかわいいな	E
おたまちゃんかぞく見たいななかよしで	F
おたまちゃんおんぶのかたちになっています	B

3)事後の検討

準備されたおたまじゃくしをじっくりと観察して、「かわいいね」「変な泳ぎ方してる」「くろいぶつぶつがある」「重なってるよ」と気付いたことや感じたことを口にする姿が印象的であった。前回のお題と比較すると、動くという点も大きな特徴であったと考えられる。活発に感じたことを交流しあう様子が、とても生き生きとしており、作品の創作意欲も掻き立てられていたように見受けられた。

(3) 第3回「きゅうり」＝6月15日

1)ねらいと準備

今回のお題は“きゅうり”に設定した。スーパーに売られている形の整ったきゅうりだけでなく、小さいものや曲がったものなど多様な形のものを用意することで、想像を掻き立てるような工夫をした。またスライド上でカップのイラストを用意し「この子が好きなものは何でしょう」とクイズ形式にすることで、きゅうりに対して知っている知識を引き出せるようにした。

2)作品

きゅうりからだやわらかいのきゅうりさま	A
きゅうりはねラーメンにのっせておいしおいしおいしいわ	C
きゅうりくんなんでバリバリゆうの	G

3)事後の検討

前回同様、実際に近くで見たり触れたりできると、子どもたちは興味津々できゅうりを見に来ていた。中には曲がったきゅうりを並べ替えて「なんて読める？」と文字として楽しんでいる生徒もいた。中でもとても興味深かったのが「バリバリ」などきゅうりを噛んだ時の音や、きゅうりをのせて食べる「冷麺」を俳句に織り交ぜて

いる生徒がいたことである。それぞれの生活経験に結びつくことの大切さを強く感じた回であった。

(4) 第4回「七夕」=7月6日

1)ねらいと準備

今回は初めて抽象概念である“七夕”が題材であった。単純に短冊のように願いごとを12音にまとめるだけでなく「天の川」や「織姫と彦星」に視点を当てることもできるよう、導入のスライドでイラストを用いて、子どもたちの知識を引き出した。短冊と笹を用意する案もあったが、学校で七夕のイベントで用意している様子があり重複を避けた。

2)作品

たなばたやおひめさまとおうじさま	H
七夕やウクライナにもへいわくれ	D
七夕や夜に向かってこんばんは	G

3)事後の検討

ねらい通り、願いごとだけでなく「織姫と彦星」について書いている生徒や、願いごとをしている姿を描いた生徒もいた。また1回目に参加をしたものの、字を書くのが難しく諦めがちだった様子の生徒が、導入で「願いごと。例えば何が食べたい？」と問われた時に「マクドナルド」とつぶやき、創作時にはしきりに「書きたい、どうかくの？」と聞いていた姿がとても印象的であった。思い浮かんだことを文字にしたいと思うことが、書くことの本動力になっていることを強く感じた回であった。

(5) 第5回「バナナ」=7月27日

1)ねらいと準備

3回目のきゅうり同様。バナナもスーパーでは見かけないような小さなものや、青いもの、チップスも用意し、想像を広げられるような工夫をした。導入のスライドでは至近距離で撮影されたバナナを用いるなど、なんだろうと思わせる仕掛けを作った。またこの回から、スライドを印刷したプリントを、導入が終わってから配布するようにした。

2)作品

おやつにはバナナじゃなくてとんかつだ	D
バナナくんフィリピンにいてあきないの	G
お月さん夜にでてくる月のかたちがバナナみたいです	F
バナナはねさるとゴリラとミニオンの大好物	C

3)事後の検討

俳句創作の直前に陶芸をしていたこともあり、黙って作業をすることで溜まっていたエネルギーを爆発させるような姿が見られた。普段は黙々と俳句の創作に励む生徒が、なかなか集中できず思い浮かんだことを、次から次へとしゃべり続ける様子は、子どもたちの実態を改めて感じる瞬間であった。準備をしていたバナナに対しては、においをかいでみたり、皮は滑って危ないという話や、どこの国でできたかという話題で少しずつ内容が広がってきた印象である。創作が豊かになる一方、17音におさまる俳句が減ってきているということが、少し気がかりであった。

(6) 第6回「汗」=8月21日

1)ねらいと準備

汗といわれると、汗をかくときの印象しかなかなか持つことが出来ない。また「暑さ」「運動」というような条件が伴うイメージが強い。そのイメージを広げ、日常の様々なシーンに広げられるよう「かく、ひく、ながす、ふく」などの動詞をあわせて導入で紹介したり「どんな時に汗をかくな」と子どもたちに問うことで、それぞれの実体験を引き出すようにした。

2)作品

あせははしるとかゆくなる	G
あせをかくあせをかくあせをかく	I
かくしごとをしてバレーで汗をかいたまるちゃん	F

3) 事後の検討

前は参加人数が3人と最も少なかったが、今回は初参加の生徒も加え、8名という大人数であった。印象的だったのは先に挙げた作品の中でFの作品である。本人は最初この俳句を早々と書き上げ「今日はもうこれだけでいいです」と言っていたのだが、先生からの「これおもしろいね。」「まるちゃん確かに汗かいてるよね。」「おもしろいからまるちゃんシリーズ書いてみようよ。」と評価されたことにより、とても嬉しそうな表情を浮かべ、頷きながら二つ目の作品を考え始めた。全ての回に通じてではあるが、子どもたちは「こんなんでいいのかな」と少し不安そうに見せてくることが多い。その時に教師が良さをみつけ、具体的に評価することで、どの生徒も肯定されたと感じていることが、表情やその後の創作態度から感じられた。題材に対しては導入で複数の動詞を提示したものの「汗がでる、汗をかく」を使用した作品にとどまったが、条件は「サウナ、運動、くさむしり」とさまざまであった。

2. 参加生徒の活動中の見とり

(1) 第1回=5月11日、第2回=6月8日、第3回=6月15日(記録なし)、第4回=7月6日の3回分

以下、実践後深田が記録した生徒の活動記録を示す。イニシャルは、授業の実際に出てくる生徒と一致する。

1) 生徒の活動の記録及び内面の活動の推測

特徴的な生徒をピックアップして記録した。

	生徒	様子
5月11日(木) 青葉	中1 H	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめての部活動参加。筆箱から鉛筆3本と赤鉛筆、青鉛筆を出して待機。 「これから何かを書く」ということは理解している様子。隣の席の高等部1年生徒が「今はこのプリントだよ」など、何かと世話を焼いてくれる。 ・好きな俳句を選ぶときには、「シャボン玉」とつぶやく。「どこがいいと思ったの?」には何と言ったか不明。「やったことある?」→「うん」。「シャボン玉好き?」→「うん」 ・俳句を作る際は、ホワイトボードの「あおば」を見て、「あ(お?)ば」と書き写していた。そのあとは、「3333」「4444…」と書きだす。でも、違ったと思ったのか、Tに「消して」と言う。そのあとは「スプラトゥーン」(←ゲームの名前)と言ったり、聞き取れなかったが何かしらの名前(「ユーチューバー」と言っていた)を伝えようとしていた。Tが消すと、ふたたび「44444・・・」と書き始めたが、最後は描いた文字の上にも線を引いていた。
	中2 D	<ul style="list-style-type: none"> ・植山先生が紹介したジェットコースターの俳句に反応。比喻で「首がもげる」と書かれていたが、「そんなニュースがあったなあ」とつぶやく。
6月8日(木) おたまじゃくし	中3 F	<ul style="list-style-type: none"> ・「思いつかないなあ」とつぶやいていたが、おたまじゃくしの実物を見ているときに、集まっているおたまじゃくしを見て「4匹並んでる。家族みたい。」とつぶやく。その後、席に戻り一句作る。その後もたびたび水槽を見に来て眺めていた。
	中1 E	<ul style="list-style-type: none"> ・初参加。体験入部。 ・長い間おたまじゃくしを眺める。はじめは「口が気持ち悪い」と言っていたが、おたまじゃくしの口に水槽越しに指を重ねて、ときには指で優しくトントンしながら、長い間眺めていた。「そろそろ書いてみようか」の声かけで席に戻る。「家に百人一首があるから(書き方が)わかる」と言っていた。「最後は決まっている」と言い、「かわいいな」をまず書いた。その後、真ん中の7文字が思いつかず、もう一度水槽を見に行った。いろいろな角度から眺めていた。最終、真ん中にも「しっぽがかわいい」というような一文を入れていた。

	高3 C	・「おたま」という音の響きに似ている言葉を見つけようと、「あたま、どたま、ちたま・・・」と声を出しながら探す。自分で思いついた言葉を「おたま」と並べて言っ ては楽しそうに笑う。書き終わった後に「待っている間に見てもいいですか」と水 槽を見に来ていた。
	高3 B	・「深田先生、ぼくわかった」と指導者に声をかけ、「スプーンに似てる」と言う。発 見したことに喜んでい様子でニコニコしていた。
7月6日 (木) 七夕	中3 D	・前時の「きゅうり」の俳句の紹介中(「～かっぱくうでさ、パリッパリッくえるぞ」 の句を聞いて)、「そんなん思ったことないわ」「かっぱは地下で働かされている」 「かっぱずし」などつぶやく。 ・七夕の俳句をつくる時、「今日は頭が痛いから…」と書こうとしなかったが、お もむろに「七夕や さっさと金が ほしいなあ」「七夕や 家から出ない方法 探 してよ」など口に出していた。
	中3 F	・「願いごと」という言葉を受けて、自分がやってみたいこと(高級ホテル、ジャグ ジーなど)をいくつか書き出していた。さらさらと書いていたので、日頃からよく 考えていることなのかもしれない。
	高3 B	・思いつくと嬉しそうに深田に報告。書き終わると「もういっこ書こうかな」と積極 的。5, 7, 5は定着しておらず、7文字に満たないところで区切って次の行に書 こうとすることがある。
	高1 G	・疲れもあるのか、ぼーっとしているようにも見えたが、ふいに書きだす。 書いてみて、なんか違うなと思うのか、また消しては書き直していた。
	中1 H	・久々の参加(第1回以来) ・織姫と彦星のイラストを見て、「おひめさま」とつぶやく。「書こうか」と言うと「書 いて」と言ったため、深田がシートに記入。「こっちはだれ?」と深田が彦星を指 さすと、「おうじさま」と答えたので、そのまま深田が「おうじさま」と記入した。 ・食べ物やお店の名前が次々出てくる。ぎょうざ、マクドナルド、スターバックス、 くらずしなど。「一緒に書きたい」 杉山先生と一緒に取り組む。

2) 俳句創作による自己表出と「二次的ことば」の現れ方

俳句形式を駆使するレベルまでは達していないが、俳句的な自己表出を楽しんでいる点が垣間見える。また岡本のいう「二次的ことば」の条件に合う言語活動があちこちにみられることもこの学習の特徴と言える。

(2) 第5回=7月27日、第6回=8月21日及び総括的記録

両回とも夏季休業中の設定なので、前後に授業は行われていない。したがって参加者数はそれほど多くない。

1) 生徒の活動の記録及び内面の活動の推測

B	夏休みの部活は欠席。 昨年度はなかなか言葉が出てこず、指導者の方を見て「なんて書こうかな」とつぶやくことが多く、指導者が出す何かしらのヒントを聞いてから書き出していたが、今年は自分で思いつくことが増えた。ひとつ書けると、次に書くことも思い浮かぶようで(ひとつめと関連している内容のものが多いが)、「わかった!」と言っていくつも書くこともあった。
C	毎回意欲的に取り組み、たくさんの句を作っていた。 夏休みの「汗」の句では、自分自身の経験や実感をもとに書いていた(ダンスや屋外作業で汗をかく、汗をかいてお風呂に入るなど。実際に毎日汗だくになっている)。
A	夏休みの部活は欠席。
G	毎回、句を考えているときや書いているときは、指導者に相談したり、友達と話したりすることはない。自分の頭の中で静かに考えて、思いついたことを書き出している模様。書き出したものを見て何か違うと感じると、いったん消して、またしばらく考えて、思いついたらまた書き出す。そのものの気持

	ちになってみたり、ふと疑問に思ったことを尋ねるような形で書いたり、いろいろな表現方法をもっている。
J	昨年度はどんなテーマがきても「鬼滅の刃」につなげてしまうことが多かったが、今年度はブームが去ったのか、自分が経験したことや自分も持っている知識などと結び付けて書くようになっていく。発想を自由に広げることが難しい様子があり、「実際に目に見えること」や「事実」などを書いている。パターンに陥らないように気をつけたいといけませんが、いろんな俳句の例を提示していくと、自分がいいなと思った形や方法を取り入れて、アレンジしていけるような気がする。
D	そのときどきで気になっている世の中のニュースなどと結び付けて書くことが多い。（今回の汗の句はビックモーターのニュースのことを書いている。） 普段から、気になることがあるとそのことが頭から離れなかったり、そのことについて話し続けたりすることがあるよう。気になって仕方がないことを俳句という形で表現して、他者に受け止めてもらえる場があるのは、いいことだなと感じる。（本人がどう思っているのかはわからないが…）
F	「汗」の句では、「ちびまるこちゃん」を思い浮かべて書いていた。描写が詳しく、彼が思い浮かべている場面がわたしも映像として頭に浮かんだ。一句思いつくと、似たようなシリーズでもう一句読むことが増えた。
H	俳句のつくり方などの理解は難しいが、テーマとなる言葉を受けて、そこから連想する単語を言うことができる。本人が発した言葉を、先生や友達が口にするので、次はまたそこから連想する単語が出てくる。どのように書いていいのかわからないが、「書きたい」という思いがあり、指導者と一緒に鉛筆をもって文字を書いていた。先輩たちにかこまれて、わたしも同じようにやってみようという思いもあったのではないかと。毎回、意欲的に取り組んでいた。 前期に取り組んだ「あおば」「たなばた」「汗」はすべて実物がなかったため、どこまで本人がわかっているのかわかえきれなかったところがある。出てくる単語は名詞がほとんどだったが、実物が目の前にあれば「まるい」「大きい」「かわいい」「～する」などの形容詞や動詞も出てくるのではないかと思う。

2) 俳句創作による自己表出と「二次的ことば」の現れ方

観察の結果、多くの創作上の特徴、自己表出の際の内面の思考活動、言語使用の特徴などが見受けられた。まず認知特性ともいえるべき創作対象の設定の相違に大きな特徴が現れた。実体験、アニメのキャラクター、時事問題等、個々の生徒の日常の興味関心が俳句に結びつくようになっていくことが認められる。さらに複数の作品を創作する際の連想の方法の多様性、他者の創作活動が自身の創作に大きな影響を与えていることも一定の成果である。短詩形文学の負担の軽い特性が特別支援学校生徒の創作活動、自己表出活動に有効に働いているといえる。

短詩形文学の創作活動が学習者の「二次的ことば」の使用とその工夫を促したこと、俳句作品として現れたことばを一定の社会性のある「二次的ことば」として意識していたこと、句会というライブの場で自らの「二次的ことば」の他者の受け止めに自身への承認・評価のサインとして見ていたことなどの点で、「二次的ことば」は発揮されていたと考えられる。コミュニケーション能力の点からも伸長が見られた。ただ、参加生徒の用いる「ことば」に一定の個別性が見られ、それが他者にはその使用者のみの世界として見られていることは否めない。それが不完全な「二次的ことば」なのか、多様性として認められるべき「二次的ことば」なのかは不明である。

Ⅲ. 研究仮説の検証・今後の展望

結章として、いくつかの視点からの集約を試みる。まず、論文副題にある「授業研究、学習者研究、教員研修研究」のそれぞれの面における研究成果を考える。次に、研究の目的・仮説として掲げた「俳句創作手段の獲得」と「自尊感情、自己肯定感の向上」の有機的な関係性、俳句創作による「二次的ことば」の現れについてである。

1. 「授業研究、学習者研究、教員研修研究」のそれぞれの面における研究成果

(1) 授業研究の面における研究成果

四か月という中期的な授業研究として、立案、計画、実践、事後研究（授業研究）のサイクル的なスタイルを確立していたため、毎回着実な成果を得ることができ、それを次回以降の発展的な授業内容に反映させることが可能になった。特別支援学校における俳句創作の授業方法の構築という大きな成果が得られた。

(2) 学習者研究の面における研究成果

本年度は学習者の観察とその記録及び分析に取り組んだ。生徒たちと日々学校生活を送っている深田教諭により重点化した記録が得られ、そこから個々の生徒の志向性・認知特性と俳句創作の関係がかなり明らかになりつつある。重要な研究成果として位置づけられる。今後も取り組みによるさらなる考究が求められる。

(3) 教員研修研究の面における研究成果

長期現職研修生の杉山教諭の知見を取り入れた立案・計画が行われた。例えば、書字指導を得意とする杉山教諭の書字の苦手な生徒に対する指導によって、劇的といえるほどの学習成果を挙げた例が見受けられた。全体として、俳句創作指導の合理的な時間、処理などを習得した。教員研修研究としての大きな成果が随所に見られた。

2. 「俳句創作手段の獲得」と「自尊感情、自己肯定感の向上」との有機的な関係

自尊感情、自己肯定感は、授業研究上では、俳句創作意欲として現れる学習意欲、自己表現意欲として確認できた。ただ、従前の自尊感情、自己肯定感との比較が必要であり、本実践だけでは検証には至らなかった。

学習者研究的には、学習者の精細な観察記録を見ると、顕著な向上がうかがわれた。一定の創作活動の成功がもたらす自己肯定と、他者の自己作品の積極的な受け止めによる自尊感情の確保がその理由ではないかと考えられる。これも個々の学習者の日常的な活動と俳句創作活動との有機的な関係性を検証することによって検証の段階に至ると考えられる。本研究では、そこまでの確定までは得られなかった。今後の研究課題としたい。

3. 俳句創作による「二次的ことば」の具体的創出

Ⅱ.2.(2)2 「俳句創作による自己表出と「二次的ことば」の現れ方」で確認したように、「一次的事ことば」から「二次的事ことば」への変容が見られたと考えられる。ただ、研究仮説として掲げた4条件に照らし合わせて、検証が可能なほどの事実としてとらえきれないため、「変容」「昇華」の徴表が認められるだろうというさらなる仮説導出レベルの把握にとどまったといえる。これも今後の継続的な研究成果による検証を待たなければならない。

4. 本稿の分担

植山が、Ⅰ、Ⅲを主に担当し、深田・杉山がⅡを担当した。ただし、すべてにわたり三者で検討している。なお深田、杉山の観察記録については、それぞれの記録のために使用しやすい文体があるので、統一していない。

<謝辞>

本研究をまとめるにあたって、ご協力、ご支援を賜った京都教育大学附属特別支援学校に感謝申し上げます。

<引用文献・参考文献>

- 1)植山俊宏・大西諒子(2023)「大学・附属特別支援学校連携による俳句創作実践プロジェクトへの参与型現職研修に関する研究」『京都教育大学教職キャリア高度化センター研究紀要』第5号/PP.89-98
 - 2)岡本夏木(1982)『子どもとことば』岩波書店/pp.195-197
 - 3)1)p91
 - 4) (2022)『第22回たんば青春俳句祭作品集』丹波市俳句協会・たんば青春俳句祭実行委員会』
 - 5)岡本夏木(1985)『ことばと発達』岩波書店/pp.42-46
- 坪内稔典(2010)『増補坪内稔典の俳句の授業』黎明書房
坪内稔典(2018)『小学生のための俳句入門 君もあなたもハイキング』くもん出版